

ものがたり観光

Narrative
Tourism

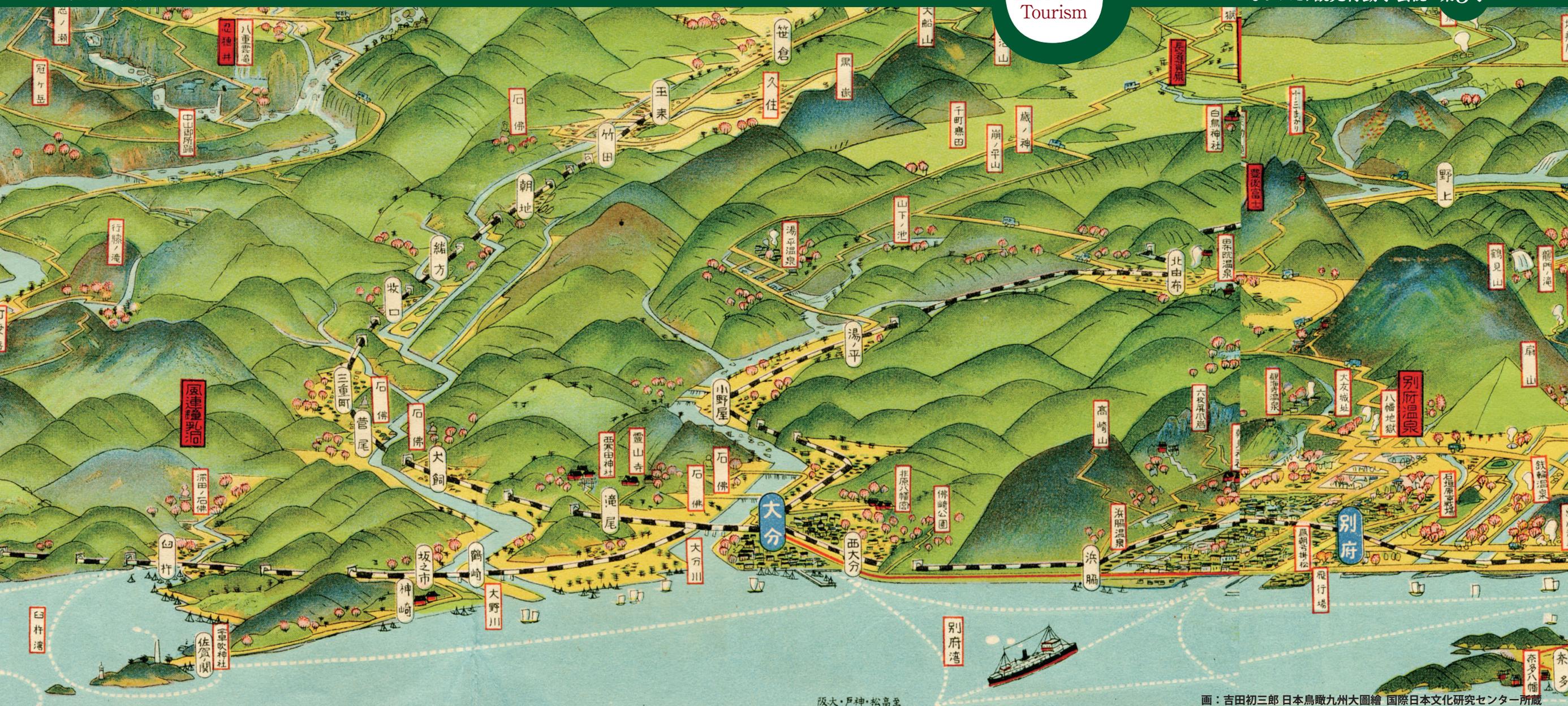
ものがたり観光行動学会誌 第3号

ものがたり観光
第3号

表紙について

鳥瞰絵師、吉田初三郎の描いた九州全域図、その一部分である。当時の新聞社、その元旦号の付録……「大正16年1月1日」という日付が興味深い。九州全域はおろか、遠く沖縄や中国大陸、朝鮮半島まで描く一方で、九州各地の鉄路が詳細に示されている。その遠近感のバランスと描ききるのに、舌を巻くばかりだ。

2013年10月16日発行



坂大・戸神・松高至

画：吉田初三郎 日本鳥瞰九州大圖繪 国際日本文化研究センター所蔵

(製複許不)

録附號八拾六千五萬壹第 聞新日每阪大日一月

2012年10月13日 第2回年次大会
「宗教と観光」基調講演

社会と宗教の位置関係 ……そして観光

釈 徹宗*

The 2nd Annual Conference Religion and Tourism(October 13, 2012)
Keynote Lecture: "Social-Religious Loci and Tourism"

SHAKU Teshu

〇はじめに

釈と申します。専門は宗教思想の研究です。主に比較という方法論をとるために比較宗教研究と呼ばれることもあります。私は浄土真宗本願寺派の僧侶でして、大阪府池田市にあります如来寺というお寺の住職もしております。また、そこを拠点としてNPO活動をしており、今日も少しご紹介させていただきますが、認知症高齢者の方と関わる活動をしております。

今日はお招きいただきまして光栄です。基調講演ということですが、いただいたテーマである「社会と宗教の位置関係……そして観光」についてどんなお話をすればいいのか悩んでいたのですが、白幡会長から「全ては観光地ではないか」というようなご挨拶がありましたので、かなり気が楽になりました。

1. 聖地・ものがたり・ツーリズム・観光

私の研究テーマの一つに「場の宗教性」というものがあります。「その場が持つ宗教性」でありますとか、「特定の場におけるある種の様式」とかに目を向けています。

例えば、この壇上にしましても、スタッフの方から「テーブルをどこに置きましょうか」とか「ホワイトボードはどこに置きましょうか」とかと尋ねられたんですけども、ここ（正面位置）にご本尊がいますと、やはりその前に立ってしゃべるのは抵抗があります。ちょっと隅っこに寄るような感じになってしまいました。それに、ホワイトボードを向こうに置くと、ご本尊の前を往ったり来たりすることになりますので、これも抵抗がある。結果的に、こういうスタイルになりました。つまり、ご本尊があるというだけでもこの場にある種の力学といいますか、様式が生まれる、そういうわけです。

*宗教学者・相愛大学人文学部教授

また宗教には「教義、思想、信条よりも関係性が先立つ」といった場合も起こります。そしてそれは「場」と密接に関係しております。実は私がNPOなどの活動をしているのも、そのあたりに理由があります。

もともと思想研究ばかりやっていたのですが、ある時から「思想とか信仰よりも関係性が先立つ場」というものについて、またそこに働く宗教性について考えるようになりました。それは自分なりに大きな転換だったわけです。今日お話する内容も、そんな取り組みに関わる部分となっております。

最近には特に「場がもっている宗教性」を積極的にほめたたえるというような行為が大切じゃないかと実感しております。例えば、学校の校歌って、そうなっているんです。どこの校歌でも、その学校がある周りの土地をほめたたえます。東には五月山があって、西に猪名川の流れがあって、などといった調子です。その地で学ぶものの態度として、それはとても重要なことですよ。

あるいは、謡曲もそうなんです。「高砂の浦をうち出でて見れば、淡路島が見えて」とか、そういった詞章が歌われています。いわば、「国ほめ」ですね。その土地をほめたたえると、土地が喜ぶような気がします。我々だって思わぬところをほめられると、うれしかったりしますからね。私など、たまに「いい声してはりますね」とか言われたりするとやけに嬉しいんですよ。「あなた指長いすな」といわれると、「えっ、そうかな。指長いかな」と、自分を見直したりして。

だから、積極的にその土地の意外なところの宗教性に目を付けてほめたたえるということを考えているうちに、3年ほど前から聖地のものがたりやツーリズムについて取り組むきっかけが生まれました。まずはそのあたりからお話させていただきます。

ひとつは、2～3年前前から芸術人類学者の中沢新一先生と「大阪アースダイバー」というのを一緒にさせていただいています。もう一段落したのですが。これは『週刊現代』で連載されて、つい先日、書籍として発刊されたところです。実は、昨日もこの学会の前夜祭のゲストとして来ておられました。

二番目の要因として、ツーリズムの専門家である井門隆夫さんとの出会いも大きなものでした。この人は、長年JTBに勤務した後に観光研究所を設立したのですが（現・関西国際大学准教授）、旅行会社に就職して最初担当した仕事は天理教の「お地場帰り」のツアーだったそうです。井門さんにはマス・宗教ツーリズムのメカニズムを教えてもらいました。天理教には「お地場」という世界創造の場が特定されているんですね。天理教の本部である天理市にあります。そして、その場へ定期的に帰る、といった信仰形態もっています。それが「お地場帰り」です。すごくユニークな宗教思想ですね。ゆえに、天理教の信者は、定期的にその「お地場」の求心力に引っ張られて帰っていくのです。夏休みになると、子どもたちも帰る「子どもお地場帰り」というのがあります。毎年25万人の子どもが集ま

ナラティブと宗教・観光のヒカリ

[登壇者] 釈 徹宗 (宗教学者・相愛大学人文学部教授) / 江 弘毅 (編集者) / ハンジ リョウ (まんが家)
加藤晃規 (学会副会長・関西学院大学総合政策学部教授)
[コーディネータ] 高田公理 (学会副会長・佛教大学社会学部教授)

“Narrative and Religion in the Light of Tourism,” Symposium on Religion and Tourism

0. はじめに——「ものがたり」が人を動かす

高田 (コーディネータ) 佛教大学で教師をしている高田です。

本日のテーマは「ナラティブ・宗教と観光のヒカリ」です。ここでいう「ナラティブ」とは「ものがたり (物語)」のことです。それは、単なる事実の叙述とは違います。物語は、どこかに、語ろうとする人の気持ちが入ってきたときに初めて生まれるのです。

亡くなられた河合隼雄さんがうまいことを言っておられます。「昨日 47 センチのタイを釣ってね」というと、話はそれで終わってしまいます。だけど、両手を広げて「こ～んなタイを釣ったんや。それが大暴れしてね」と言うと、そこに物語が生まれ、相手も聞いてみようという気になる。話の中に、語る人の心の動きが込められたとき、そこに物語が生まれるのだというわけです。

例えば東北に、立石寺というお寺があります。ここを訪れたときに芭蕉は「閑かさや岩にしみいる蟬の声」という句を残しました。立石寺は立派で美しいお寺です。でも、誰もが驚くような大伽藍があるわけではありません。ところが、芭蕉のこの句のおかげで、たいへん有名になりました。

お伊勢さん、つまり神宮でも、西行が「何事のおはしますかは知らねどもかたじけなさに涙こぼる」という歌を詠んでいます。それが何であるかは、よく分からないけれども、お伊勢さんには、不思議に厳かな空気がある、といったような意味でしょう。こういう歌に触れると、人は自分でもそこに行ってみたくないのでないでしょうか。

今日の午前中の話の中で釈さんは、このように何かを感じさせる核を「リチュ

アル」という言葉で捉えておられました。そこに「リチュアル」があれば、その周辺に様々な物語が生まれ、魅力を発揮するようになっておっしゃいました。

これと同じようなことは西洋人も感じていたようです。例えばドイツの神学者ルドルフ・オットーは、それを「ヌミノーズ」という言葉で捉えました。日本語に訳すと「聖なるもの」ということになるのですが、そういう何かに出会うと、理由は分らないままに人は、何となく人間の心の原点に触れたような気分になるというのです。

ヌミノーズを感じさせるのは、必ずしも宗教施設に限りません。富士山に登り、雲海から太陽が出てくるのを見た人は、ほぼ間違いなく心を震わせられる。あるいは、先ほど豊後大野の村の風景を見せてもらいました。その風景にも心を動かされる何かがあったように思います。それを本学会の理事である李さんは、

「大野市には何も無い、しかし日本がある」

と、じつにうまい言い方で捉えました。これもまたヌミノーズの一形態なのだと思います。そういう意味において、旅や観光で出会う多様な魅力と宗教的なものが、人の心を引きつける仕方には、相互に似たものがあるように思います。実際、旅や観光と宗教的な巡礼などは、どちらも移動を伴いますし、相互に古くから深く関わり合ってきたのではないのでしょうか。

そこで、先の釈さんのお話を聞きになった3人の方々に、それを踏まえたお話を頂戴しようと思います。最初は、当学会の副会長で関西学院大学総合政策学部教授の加藤晃規さんです。加藤さんは毎年、イタリアを訪れて、その自然と文化を研究しておられます。そのイタリアは、どこの街に行っても、立派な教会があって、いずれも強烈なヌミノーズを発揮しています。それはキリスト教の天国をこの世に現出させているという意味で、一種の「バーチャル天国」なんですね。実際、石の建築物は、冬は暖かいし、夏は涼しい。周囲には美しい自然が広がっています。そんな教会の天井は非常に高く、正面を見ると美しいステンドグラスを通して、いわば「天上からの光」が降り注いでくる。そこに荘厳なパイプオルガンの大音響が響き、お香のいい匂いが漂う。そういう環境のなかで気分よくなっている信者に向けて神父が、神の世界の話をする、まあ参加者は、「そうかいな」と思ってしまうのでしょうか。

イタリアというと、そういう場所のありようを思い出すのですが、まずは加藤さんに、イタリアをめぐる「旅と宗教」の話をお聞かせしてもらおうことにします。

1. 宗教と観光——ローマ都心の意味ある場所

加藤 バーチャル天国という話がありましたが、私は宗教および都市観光という関連